

「線形代数学 A」演習問題

1. 原点を O とし, 点 $A(2, -1, 1)$, $B(1, -1, 2)$, $C(5, 1, 3)$ の位置ベクトルをそれぞれ $\mathbf{a} = \overrightarrow{OA}$, $\mathbf{b} = \overrightarrow{OB}$, $\mathbf{c} = \overrightarrow{OC}$ とおく.

(1) 点 A, B を通る直線と xy 平面のなす角 θ ($0 \leq \theta \leq \frac{\pi}{2}$) を求めよ.

(2) 点 A, B, C を通る平面の方程式を求めよ.

(3) 外積 $\mathbf{a} \times \mathbf{b}$ を求めよ.

(4) 組 $\{\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c}\}$ は 1 次独立であることを示せ.

(5) $(\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c})$ は右手系か左手系か.

(6) 四面体 $OABC$ の体積を求めよ.

2. n 次正方行列 N は $N^k \neq O$ ($1 \leq k \leq m$) かつ $N^{m+1} = O$ をみたすとする. n 次元ベクトル \mathbf{v} は $N^m \mathbf{v} \neq \mathbf{0}$ をみたすとする. このとき, ベクトルの組 $\{\mathbf{v}, N\mathbf{v}, \dots, N^m \mathbf{v}\}$ は 1 次独立であることを示せ.

3. 対称行列 A と対称行列 B の積 AB が対称行列となるための必要十分条件は A と B が可換であることを示せ.

4. A は実数を成分とする n 次正方行列とする ($n \geq 2$). 以下の命題 (1)~(3) の真偽を述べ, 真ならばその証明を与え, 偽ならば反例を一つ与えよ. ここで O は零行列, E は単位行列, ${}^t A$ は A の転置行列を表す.

(1) $A^2 = E$ ならば $A = \pm E$ である.

(2) ${}^t AA = O$ ならば $A = O$ である.

(3) $A \neq E$ かつ $A^3 = E$ ならば $A^2 + A + E = O$ である.

5. $N = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ とおく.

(1) N は正則でないこと示せ.

(2) N^n ($n \geq 1$) を求めよ.

(3) $(E + N)^n$ ($n \geq 1$) を求めよ.

6. ただし A, D , は正方行列とし, O は零行列である. P は正則とする. 以下を示せ.

(1) $\begin{pmatrix} A & O \\ O & D \end{pmatrix}^n = \begin{pmatrix} A^n & O \\ O & D^n \end{pmatrix}$

(2) $(PAP^{-1})^n = PA^n P^{-1}$

7. 正方行列 $X = \begin{pmatrix} A & B \\ O & D \end{pmatrix}$ を考える. ただし A, D は正方行列とし, O は零行列である. A, D が正則のとき, X^{-1} を A, B, D などを用いて表せ.

8. A, B は上三角行列とする.

(1) 積 AB も上三角行列であることを示せ.

(2) A が正則のとき, A^{-1} も上三角行列であることを示せ.

9. 次の行列式を求めよ.

$$(1) \begin{vmatrix} -1 & -1 & 2 \\ 2 & 3 & -5 \\ -2 & -3 & 3 \end{vmatrix} \quad (2) \begin{vmatrix} -5 & 2 & 1 & 5 \\ 2 & 4 & -3 & 4 \\ -3 & 4 & 2 & -1 \\ 4 & 6 & -7 & -2 \end{vmatrix}$$

$$(3) \begin{vmatrix} b+c & a-c & a-b \\ b-c & c+a & b-a \\ c-b & c-a & a+b \end{vmatrix} \quad (4) \begin{vmatrix} a^2 & (b-c)^2 & bc \\ b^2 & (c-a)^2 & ca \\ c^2 & (a-b)^2 & ab \end{vmatrix}$$

10. 次の n 次行列式 ($n \geq 2$) を求めよ.

$$I_n = \begin{vmatrix} 1 & 1 & 1 & \cdots & 1 \\ -1 & a & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & -1 & a & \ddots & \vdots \\ \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & 0 \\ 0 & \cdots & 0 & -1 & a \end{vmatrix}$$

11. 連立 1 次方程式
$$\begin{cases} x_1 + x_2 + x_3 + x_4 = 1 \\ 4x_1 + 2x_2 + x_3 + 3x_4 = 5 \\ x_1 + 3x_2 + 2x_3 + 4x_4 = 6 \end{cases}$$
 を掃き出し法で解け. また解の自由度を求めよ.

12. 連立 1 次方程式

$$(E) \begin{cases} x_1 + 3x_3 - 2x_4 w = 0 \\ 2x_1 + x_2 + 4x_3 - x_4 = 1 \\ ax_1 + ax_2 + x_3 + x_4 = 2 - b \end{cases}$$

を考える. ただし a, b は実数とする.

(1) (E) が解をもつための実数 a, b の条件を述べよ.

(2) (E) の解の自由度が 2 となる a, b の値を求め, そのときの一般解のベクトル表示を求めよ.

13. $A = \begin{pmatrix} 1 & -1 & 2 & a \\ 1 & -2 & -1 & b \\ 2 & -3 & 1 & 1 \\ 3 & -5 & 0 & -1 \end{pmatrix}$, $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix}$, $\mathbf{b} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ c \\ d \end{pmatrix}$

とする.

(1) A のランクが 3 となるための a, b の条件を求めよ.

(2) 連立方程式 $(E): A\mathbf{x} = \mathbf{b}$ の解の自由度が 2 となるように a, b, c, d の値を定め, そのときの一般解をベクトル表示の形で求めよ.

14. 次の行列の逆行列を求めよ.

$$(1) \begin{pmatrix} a & 1 & 0 \\ 0 & b & 1 \\ 0 & 0 & c \end{pmatrix} \quad (abc \neq 0) \quad (2) \begin{pmatrix} 0 & 1 & -2 & 0 \\ 2 & -1 & 2 & 1 \\ 2 & 0 & 1 & 1 \\ 1 & 1 & 1 & 1 \end{pmatrix}$$

略解. (詳細は各自で補うこと)

1. (1) 方向ベクトルと法線ベクトルのなす角は $\phi = \pi/4$,
 $\theta = |\pi/2 - \phi|$ より $\theta = \pi/4$

(2) $2x - 5y + 2z = 11$. (法線ベクトルとして $\mathbf{n} = {}^t(2, -5, 2)$ がとれる.)

(3) $\mathbf{a} \times \mathbf{b} = {}^t(-1, -3, -1)$

(4), (5), (6) 行列式 $D = |\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c}| = -11$. $D \neq 0$ より 1 次独立. $D < 0$ より左手系. $V = 11/6$.

2. $c_0\mathbf{v} + c_1N\mathbf{v} + \dots + c_mN^m\mathbf{v} = \mathbf{0}$ とする. 両辺に N^m をかけると $c_0N^m\mathbf{v} = \mathbf{0}$ となるので $c_0 = 0$ となる.

ゆえに $c_1N\mathbf{v} + \dots + c_mN^m\mathbf{v} = \mathbf{0}$ となるが, 両辺に N^{m-1} をかけると $c_1 = 0$ となる. 以下同様にして, $c_i = 0$ ($\forall i$) となり, 1 次独立.

3. A, B が対称行列より ${}^t(AB) = {}^tB{}^tA = BA$. A, B が可換なら, ${}^t(AB) = AB$ となり (AB) は対称行列. 逆に AB が対称行列なら, $BA = {}^t(AB) = AB$ となり, A, B は可換.

4. (1) 偽, (2) 真 (tAA の対角成分をみる) (3) $n \geq 3$ のとき偽, 例えば $A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ は反例. しかし, $n = 2$ のときは真である.

5. (1) $|N| = 0$ より非正則.

(2) $N^2 = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$, $N^n = O$ ($n \geq 3$).

(3) E と N が可換なので 2 項定理より $(N + E)^n = \sum_{k=0}^n {}_nC_k N^k = E + nN + \frac{n(n-1)}{2} N^2 = \begin{pmatrix} 1 & n & \frac{n(n-1)}{2} \\ 0 & 1 & n \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$.

6. (1) 帰納法で証明できる.

(2) $(PAP^{-1}) \dots (PAP^{-1}) = PA(P^{-1}P)A(P^{-1}P) \dots (P^{-1}P)AP^{-1} = PA^nP^{-1}$.

7. $X^{-1} = \begin{pmatrix} A^{-1} & -A^{-1}BD^{-1} \\ O & D^{-1} \end{pmatrix}$

8. $A = (a_{ij})$ が上三角 $\iff a_{ij} = 0$ ($i > j$) に注意する.

(1) $(AB)_{ij} = 0$ ($i > j$) を示せばよい. $(AB)_{ij} = \sum_{k=1}^n a_{ik}b_{kj}$ である. $1 \leq k \leq i-1$ のとき $a_{ik} = 0$, $i \leq k \leq n$ のとき, $j < i$ より $b_{kj} = 0$ となる. したがって, $(AB)_{ij} = 0$ である.

(2) $A = \frac{1}{|A|} \tilde{A}$ より, 余因子 $\tilde{a}_{ij} = 0$ ($i < j$) を示せばよい. (\tilde{A} は (\tilde{a}_{ij}) の転置であることに注意せよ.)

$a_{ij} = (-1)^{i+j}|A_{ij}|$ であり, A_{ij} は A から i 行 j 列を除いた行列であるので, $i < j$ のとき A_{ij} は三角行列で対角成分に 0 が現れる. ゆえに $a_{ij} = (-1)^{i+j}|A_{ij}| = 0$ である.

9. (1) = 2, (2) = 900, (3) = $8abc$

(4) = $(a-b)(b-c)(a-c)(a+b+c)(a^2+b^2+c^2)$

10. $I_n = a^{n-1} + a^{n-2} + \dots + a + 1$

11. $\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 4 \\ -3 \\ 0 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} 0 \\ -2 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$. 解の自由度 1.

12. (1) $a \neq 1$ または $(a, b) = (1, 1)$.

(2) $a \neq 1$ のとき解の自由度 1. $(a, b) = (1, 1)$ のとき解の自由度 2 となる. したがって, $(a, b) = (1, 1)$.

(3) $\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} -3 \\ 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + s \begin{pmatrix} 2 \\ -3 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$.

13. (1) $1 - a - b \neq 0$ または $1 - a - 2b \neq 0$ すなわち $(a, b) \neq (1, 0)$ のとき $\text{rank } A = 3$.

(2) $\text{rank } A = \text{rank}(A, \mathbf{b}) = 2$ のとき解の自由度が 2 となる. ゆえに, $(a, b, c, d) = (1, 0, 2, 3)$ となる. この

とき $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} -5 \\ -3 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + s \begin{pmatrix} -2 \\ -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$.

14. (1) $\begin{pmatrix} \frac{1}{a} & -\frac{1}{ab} & \frac{1}{abc} \\ 0 & \frac{1}{b} & -\frac{1}{bc} \\ 0 & 0 & \frac{1}{c} \end{pmatrix}$

(2) $\begin{pmatrix} -1 & -2 & 3 & -1 \\ -1 & -2 & 2 & 0 \\ -1 & -1 & 1 & 0 \\ 3 & 5 & -6 & 2 \end{pmatrix}$